オイリュトミー公演

暗闇に灯る響き

パンデミックや戦争、そして日本では巨大地震で今年の幕が開け多くの人々が深い心の傷や痛みと戦っている。しかし次々に脅威が襲い幾ら人の心が揺らいでもそれに負けじと沸き起こる意志の力がある。真の芸術家はその力を音や言葉、そして色や形で表現しようという欲求に駆られる。

教養あるキリスト教の家庭に育ちシェーンベルクにも教えを受けた才能ある作曲家、そしてルドルフ・シュタイナーの思想に深く影響を受けたヴィクトール・ウルマンは第二次大戦中ユダヤ人としてテレージエンシュタット強制収容所で過ごしたのちアウシュヴィッツのガス室で殺害された。
その死の僅か２ヶ月前に作曲された全５楽章からなる遺作『ピアノソナタ第七番』の最終楽章で彼は自身のルーツを表現するヘブライ民謡を変奏曲で織りなし、それに続く壮大なフーガではヨーロッパの作曲家であるという自身のアイデンティティーを象徴したB–A–C–Hのモチーフを取り入れて自己の存在を肯定し、そこに未来への希望を託した。また文才にも恵まれた彼は多くの詩をも遺している。『我らは皆ひとつ。世界は生きている。守護天使の黄金の旗がたなびく。そして神は近くにいる、私の心の中に。』想像を絶する苦境にありながらこうした文をしたためることが出来た彼の生きる事への意志。そうしたものを表現した曲や詩などを音楽理論や文法等の規則性を保ちながら体の動きや舞台上のフォルメンで可視化する芸術、それが20世紀初頭にルドルフ・シュタイナーによって創造されたオイリュトミーであり、ダンスや舞踏などとは基本的に異なるものである。

公演第一部ではそのウルマンの詩や曲に加えてフランク・マルタン、アウグスタ・リード・トーマス、セザール・フランク、そして2018年に58歳の若さで惜しまれて逝去した藤井喬梓のピアノ曲と彼が愛読し度々インスピレーションの源泉ともなった片山敏彦の詩、更にこの公演の為に委嘱された島根県在住・林皆仁の詩も初演される。
第二部では正に百年前の1924年夏に晩年のルドルフ・シュタイナーがイギリスで行った講演に於いてまるで遺言の様に語った音楽的記述を基にしたアンサンブル自作のオイリュトミー作品が披露される。これは2020年にゲーテアヌムからの依頼を受けて創作されたもので、オイリュトミーの様々な基本要素が盛り込まれたものである。

オイリュトミーは現在、全世界に1200校以上存在するシュタイナー学校全学年の必須科目として子供の成長を体・心・精神の各面から支える教育手段ともなっており、またその治癒効果はオイリュトミー療法として専門のセラピストによって医学的に応用され、ドイツでは保険適応も可能となっている。

ミュンヘン・オイリュトミー・アンサンブル ALEPH 日本公演に寄せて

ミュンヘン・オイリュトミー・アンサンブル ALEPHは２人のオイリュトミストと１人の音楽家によって1996年に創立され、ヨーロッパ６ヵ国で音楽オイリュトミーを中心とした公演を行ってきました。しかし公演ばかりではなく大きな講習会などでも指導的役割を果たし高い評価を得ています。2019年に2人の日本人オイリュトミストがメンバーに加わった後も精力的に活動し、ゲーテアヌムでの学会等でもその研究成果を発表しています。そうした活動を私はこの目で確かめてきました。今回アンサンブルが遂に訪日することを私は嬉しく思い、日本でも多くの方々がその公演を観ることを期待しています。日本人初めてのオイリュトミストがその日本の地で活動を開始して以来43年が経ち、日本でもオイリュトミー芸術が少しずつ知られるようになりました。しかしヨーロッパに活動拠点を置くアンサンブルが日本で公演する機会はまだ少なくミュンヘン・オイリュトミー・アンサンブル ALEPHの日本公演は貴重な価値があります。その成功が日本でのオイリュトミーの発達に寄与することを私は願っています。

ゲーテアヌム朗誦音楽芸術部門代表 シュテファン・ハスラー

チラシに掲載されている絵はゲーテアヌム造形芸術部門及び美学部門代表クリスティアーネ・ハイド女史が2019年に編集した著作集『私の中の黙示録』の為に描いたもの。彼女の快諾によりアンサンブル日本公演のプログラム・イメージ画として使用されている。